

# ミサゴ便り

平成 15 年 4 月 1 日発行

弓削野鳥の会編集発行



今年はキレンジャク

もやって来ました

3月の初旬、仕事に行く道すがら、何気なく空を見上げると、アンテナに鳥の群れが止まっていました。はっ

きりとは確認できなかったが、まさかその群れがヒレンジャクの群れとは思いませんでした。最初はムクドリの群れかなと思ったが、よく見ると頭に冠羽がありました。紛れもないヒレンジャク

の群れでした。また、嬉しいことに15羽中キレンジャクも2羽ほど交じっていました。去年は三山で群れを観察しましたが、こんなに近くで観察できるとは、どう



も民家の庭に植えてある紅い木の実を食べに来ているようでした。

2、3m ほどの至近距離でも逃げる様子もなく、わりと簡単に撮影することができました。この鳥はヤドリギ、タチバナモドキなどの実を好んで食べ、糞は種子が消化されないまま排出されるので、種子が伝播されるのに役立っているそうです。(T. M)

「空を翔ぶもの」

平山和昭

鳥は恐竜から進化したという証拠が、中国でたびたび発見されているという。証拠というのは、もちろん化石。いかつい体躯に、ふくよかな羽毛のあとが見えるのだそうだ。

恐竜は冷血から温血へと進化？し、鳥に変身して氷河期を乗り越り、生き延びた、もっぱらなのだ

生物は、発生と返しをしているが、「命」という



という説が、  
そうである。  
絶滅の繰り  
かにみえる  
大きなカテ

ゴリーから見れば、発生は一度きりで、あとは変化をくりかえしている、と考えることもできる。

何十億年、何百万年という時間から見れば、人間の寿命はせいぜい百年。鳥ならもっと短く、瞬きの時間にも値しない。

人類という生き物が、恐竜に毛が生えて進化したという証拠は、

いまのところまだ未発見だが、どこかで恐竜と繋がっていることは、ありそうな話だ。

人間は温血動物だが、相当に冷血の部分ももちあわせている。血は温くとも、人間のすることには、性根はまぎれもなく爬虫類を彷彿させる事例が、数え切れないほどあるからだ。

ところで、バードウォッチングをしていると、あの鳥たちの、自由自在に空を駆ける様に、魅入られない人はいないだろう。確かな



理由はわからないが、あの鳥たちの、色、かたち、動態、そのどれひとつとっても、ひたすら翔ぶために、やむを得ず捨て去

った機能の数々があったことは、容易に想像がつく。そして、もしかしたら、鳥たちが、軽やかに空中を飛翔するためには邪魔だとして、退化させた機能をすべて拾い込んで人類は発生したのかもしれない。

鳥にあこがれ、心が吸い寄せられていくのは、なにかそういう生き物としての完結を、人間の本能が求めるからなのだろうか。

とはいうものの、天人、天女、天使とかよばれる者は、みな軽やかに虚空を舞い、情け深く円満な相を呈しているのにくらべ、悪魔

とか邪鬼とか魔物とかよばれる人型の者は、邪悪の相を呈している  
とされる。これもまた、一つの完結をもとめる姿であるのかしら。

ときあたかも、人類文明の発祥地あたりで、巨大恐竜にも似た空  
翔ぶモノが、爬虫類の冷血さをぞんぶんにふるわんとしている。

その空を翔ぶモノは、やはり鳥  
の形をしてはいるものの、鳥の  
持つ軽やかさとは似ても似つ  
かぬ、強引な推力をもってして、  
空を切り裂いてゆく。因果律を



無視したところに進化の恩恵はないというのが、生き物の上にかぶ  
せられた宿命だというが、果たしてそういう空の飛びかたを身につ  
けてしまった人類は、鳥のように喜びをもたらす存在として、後の  
世まで、生き延びてゆけるのだろうか。

羽冠たて砂漠の王子かお姫様かくやおはすか黄連雀 ゆげる

南シナ海の宝石(part 4) 松本敏和

南シナ海の宝石と呼ばれるビンタン島にも河に少ない数ではあるが、  
ペットボトルや発砲スチロールなどが浮かび、河岸にはドラム缶や  
廃タイヤが放置されている。河口近くにはマングローブの木ででき  
た船を漁師が係留したり、漁具の準備をしたり仮眠したりする船宿

が多くあり、その廃棄物を漁師が漁のために持ち込んだ物か、また私たち観光客が捨て去った物かいずれにしろこの風景には似合わないように思われた。また、観光のために森を伐採し、ホテルを建設したり、道路を拡張し排ガスを撒き散らすなど、観光客として私たちが訪れることにより間接的ではあるが、環境破壊に加担しているように思い考えさせられた。シンガポール島も埋立てにより徐々に拡張していくための大量の土砂を必要とし、そのため近隣の国々の



丘陵を掘削した土砂をシンガポールへ運ぶこともまたジャングルが失われる要因の一つになっているようだ。東南アジア諸国の都市開発は今までにない速さ

で自然に大きなダメージを与えている。シンガポールには植物園、動物園、水族館、鳥園など数多くの施設が整っているにもかかわらず、野生の動植物を見たいという単なる私の興味本位の行動が、自らの意思に反して自然に負荷を掛け、自然環境を思いもよらない形で破壊していくことの現実に、胸を痛めながら帰国の途に着いた。広島空港に降り立ったとき、本郷町の山々の落ち着いた日本的な美しさに、傷ついた心が少しは癒されたように思った。また、自然豊

かなビンタン島がいつまでも宝石のように光り輝いているようにと心から願いたい。(the end)

## 水辺の鳥観察会 (町外遠征 … 松永湾へ)

底冷えのする1月19日(日)、午前7:00公民館に12人集合3車に分乗し因島、向島、松永湾へと町外遠征に行きました。30分ほど



走って現地に到着、あいにくの曇り空でしたが、松永湾の干潟には沢山の水鳥が群れをなしていました。中でもヨシガモ、コガモ等がお尻をだして水中に潜り、餌を

探している姿は可愛らしいものでした。大きい干潟や河川が少ない弓削ではなかなか見られない光景です。水鳥の種類の多いこと、まさに野鳥の楽園ですね。また識別も難しいため、参加者も図鑑を見ながら双眼鏡やスコープで逐一確認していました。身近にこんな観察場所があれば最高ですね。松永湾を後に、以前ご指導いただいた津田さんの情報により、近くの新池にも行ってみました。ここにも10



種類ほどの水鳥が群をなして水面を気持ちよさそうにスイスイと泳

いでいました。水鳥の観察を堪能した後、昼食を取り一路因島に向かい車を走らせました。竹長のアウトドア派の喫茶店「カズン」にて、鳥合わせと反省会、楽しい遠征でした。来年は笠岡干拓地に行ければなと思っていますので楽しみにしてください。

## フォトギャラリー (撮影 今治市 青野浩さん)

このたび、日本野鳥の会、愛媛東予地区連絡会の青野浩さんより貴重な写真を提供いただきました。ありがとうございました。



### オオカラモズ

伊予市大谷川で撮影されたそうです。この鳥は冬鳥で干拓地や農耕地、草地等で生息し、尾は長く、背中、腰は灰色で尾が黒くて、眉斑は白く過眼線は黒い。雌雄同色とのこと。モズは体のわりには獰猛でカワセミ等の鳥の仲間も襲うことがあります。

### トラツグミ

砥部町総合運動公園で撮影されたそうです。

他のツグミ類よりひとまわり大きく、生態もかなり違い、曇りの日や夜間、森の奥でヒーと陰気な声でなく、地方によっては不吉な鳥とされている。北海道では夏鳥、本州では留鳥であるが、冬は温暖地に漂行する。弓削でも度々観察されています。(先日上弓削の公営住宅付近で観察できました)警戒心の強い鳥ですので観察はなかなか難しい。



3月26日、久しぶりのバードウォッチングと楽しみにしていたが、生憎の雨、中止になるかと思いながら公民館へ出かけてみた。雨天のため会員も少なく、どうしようかと相談したところ、折角だから車で三山でも一回りしてみようかとなった。上弓削緑ヶ丘団地から三山に向かう道中、カラスは雨などお構い無しにカーカーと飛びかうのを

姿は見えない。時々、林の中でウグイス、カワラヒワ、ホオジロの鳴き声が聞こえていた。三山の頂上は風も強く



く雨も上がりそうにないので、早々と引き上げて久司浦へ下ることにした。すると先頭の車が急に止まった。どうも何か鳥を見つけたようだ、車を降りて双眼鏡で覗いてみると、なんとこんな雨の中でウソに遭遇、洒落ではないがウソだろうと思いつつ、もう一度、双眼鏡を覗いてみると、前方谷側の林の梢にメス一羽、すぐ左横の枝にオス一羽、やっとならみかけた桜の新芽を啄ばんでいる。よくよく見ると少しはなれた下の枝に二羽のオスが止まっていた。ウソのオスは胸が美しいバラ色であるが、よく見ると胴の周りもバラ色で



あったように思えた。何か納得できないまま帰宅し、早速色々な本で調べてみると、次のような記載を見つけた。

※ ウソ (Pyrrhula, Pyrrhula) ラテン語でウソの意

冬季に本州に渡来する。群れの中にはアカウソも稀ではない、シベリアから渡来する亜種でオスは腹部も多少バラ色を帯びているとあった。気になっていたことが、自分なりにどうにか収まりが着いたような気がした。春とは言えど一面灰色の寒い雨の中、ウソの出現でこれほど満ち足りた気持ちになれたのも、実は三年前に初めて一羽のウソ (♂) を見て以来、あの胸のバラ色をもう一度見たいと、毎年春が来るのを楽しみに遭遇することを願っていたわけで、念ずれば叶う！でした。次回はアオバト (♂) をキャッチしたいと思っています。 オーウォアオー

## 探鳥例会情報

## 弓削野鳥の会

### ☆ 1月19日 町外遠征 (松永湾へ)

参加者：角濱光一、平山和昭 (久子)、森岡良子、上森エミコ、白玉明子、松本敏和 (佐加江、祐子、真理子、純一)、村上尚 12名

※ 観察した鳥：ヨシガモ、コガモ、カルガモ、バン、コサギ、ダイサギ、イソシギ、カワウ等

### ☆ 2月16日 雨天のため中止

### ☆ 3月16日 三山周辺【雨天でしたが行ってみました。】

参加者：角濱光一、平山和昭、森岡良子、中塚いつ子、村上尚

※ 観察した鳥：ヒヨドリ、ホウジロ、ジョウビタキ、メジロ、ウソ

※運良くウソの群れをゆっくり観察することができました。

ヒナを拾わないで！！

(財) 日本野鳥の会

野鳥たちにとって、4月から7月にかけて子育てシーズンの真っ最中。まだ飛ぶ力が十分ついていない“巣立ちヒナ”が、地面にいる



のを見かけることが多くなる季節です。大半は拾う必要がない元気なヒナで、迷子になったものと勘違いして持って来てしまうことが多いのです。このような行き違いを少な

くするために、「ヒナを拾わないで」キャンペーンを実施中です。ヒナを見かけたときは、近くに親鳥がいます。そのままにして、すぐにその場を離れましょう。PRにご協力をお願いします。

#### 4月の探鳥会と総会のご案内

4月の探鳥会については、平成15年度総会も兼ねて

4月13日(日)(午前9:00 公民館集合)に開催いたし

ます。(忘れないようにカレンダーにチェックしてね)



#### 【自然観察記録等の投稿のお願い】

(自然観察に関する原稿、たとえば、鳥、植物、昆虫、魚、海藻等見たままの感想等お気軽にお寄せください。) 連絡先: 下弓削315、弓削野鳥の会事務局(村上尚) 77-3607までお願いします。